二度の転職を経た機械系研究者

Mechanical Research Engineer Who Has Experience
of two times Job-change

執筆者プロフィール

澤田 貴彦

Takahiko SAWADA

■2003 年電気通信大学大学院電気通信学研究科
機械制御工学専攻修士課程修了

■主として行っている業務・研究
・鉄道、電力機器、昇降機等の製品における強度
信頼性評価に関する研究

■所属学会および主な活動
日本機械学会、日本材料学会

■勤務先

正員、(株)日立製作所 機械研究所 第三部
強度信頼性ユニット 研究員

(〒312-0034 茨城県ひたちなか市堀口 832-2
/E-mail: takahiko.sawada.dy@hitachi.com)

1. はじめに

私はこれまで二度の転職、三つの職場を経験してきた。自身のキャリア形成において“やりたいことをやる”、“視野を広げる”ための一事例として紹介させていただく。さて、何をどのように書こうかと悩んだあげく、真っ向から自身の履歴を記述することにした。

2. 最初の就職

某私大の工学部機械工学科を出た後、某独立行政法人を最初の就職先とした。ここでは、重点研究支援員（以下、支援員）として約3年間勤務した。支援員とは、国立研究機関あるいは独立行政法人において研究内容や研究者のニーズに合わせた研究支援業務を行

う技術者を指す。ここでは主に構造材料の強度評価業務に携わり、強度試験全般を担当した。得られた研究成果を学会発表する機会も多数いただいた。契約期間満了時期が近づいたところ、次のキャリア形成のことも鑑みて大学院進学を検討し始めた。学部時代の指導教官のご紹介や、自宅から近かったことも考慮して電気通信大学大学院へ進学することとした。一般の大学院入試を受けたが、材料力学以外の科目は内容を思い出すのに四苦八苦し、研究室の同期の中ではいちばん下の成績での合格であった。

3. 最初の転職活動記

さて、修士1年の終盤から就職活動が始まった。周りの学生に比べて3歳ほど年上であったが、新卒として共に活動した。私の中ではこれが事実上、最初の転職活動である。これまで培った機械工学、中でも材料強度の知識を生かした製品開発がしたい、という思いを志望動機の支柱とし、学校推薦には頼らず強気に自由応募で挑んだ。特異な経歴を持つため、厳しい活動になることを予想したが、意外と反応はよく第一志望先から電話にて内定の連絡を受け、4月1日のエイプリルフルではあったが、疑うことなく二つ返事で承諾した。実は、次の日にも他企業の採用試験に出向いたのであるが、このときスーツの上下を色違いで着て出かけるという痛恨のミスを犯し、この時点で活動終了を宣言した、というオチがつく。

4. 第2の職場

無事に修士課程を終え、2003年4月より自動車部品メーカーへ入社し

た。当時27歳。同期の中では長老であった。配属先は研究部門。新素材の製品適用に関する実験的研究を担当し、設計、試作、評価、フィードバックという一連の開発プロセスに携わった。材料の素性を深く知ったうえで製品へ展開しなければならないため、設計や生産技術のほか、機械工学ではあまりなじみのない化学知識、分析技術を多少なりとも身につけることができた。また、毎週のように工場で試作を繰り返すことにより、5ゲン（現場、現物、原理、原則、現象）主義を叩き込まれた。試作品は実験室で評価を行ったほか、過酷環境下の評価も行う必要があり、海外にて実車試験も実施した。写真は北アメリカへ出張したときのもので、実車試験の合間の現地調査で撮影した1枚である（図1）。このころは、冬が終わりを迎えた時期で、過ごしやすい気候であった。いつまでも上達しない英語と、時差に苦しんだが、海外で見聞を広める楽しさを知った。このころ、結婚を経て1児の父になった。

5. 2回目の転職活動と退職

業務を進める中、自分自身の中でのいろいろな考えが交錯し、30歳という一つの節目を迎えようとしていた2006年の春先、再度の転職を決意した。家族の同意を得るところからのスタートであったが、義父の後押しもあり、妻にもすんなりと受け入れてもらえた。私は幼稚園、小学校、中学校と一度ずつ、親の仕事の都合で転校を経験したため、新しい環境へ飛び込むことのストレスの大きさを熟知している。子どもにはそのような思いをさせたくなかったので、この決意が幼稚園就学前だったことは幸いであった。

図1 業務の合間に（背景はモントリオール市）

図2 採用内定通知書と職務経歴書の一部

さて、転職活動の始まりである。自動車部品を手がけているのだから、という浅はかな思いが先行した自動車メーカーへの挑戦は全敗。一度原点に戻り、本当に自分は何がやりたいかを再整理して志望先を絞り込んだ。週末を中心に、ときどき有給休暇を取りながら転職活動を行い、その結果、2社から内定をいただき、妻とも相談のうえ、今の職場に転職することを決意した。この間、約半年を要した。図2は、採用内定通知と、活動に使用した職務経歴書である。これらは今でも保管している。

転職先が決定した直後、退職の意思を上司に告げた。退職トラブルという文字が脳裏をよぎったが、やりたいことがあるのであれば、ということで快く受け入れていただいた。“最近の仕事ぶりを見ていると部下に仕事を引き継いでいるように見えた”とおっしゃっていたが、正にそのとおりで

あった。極力態度に出さないように振る舞っていたが、どうやら勘づかれていたようである。

6. 郷に入っては郷に従え

再転職先は、現在勤務する（株）日立製作所機械研究所である。経験者採用という形での入社であったが、技術面の知識はともかく、事務的な面の知識は全くないため、これに慣れるために時間を費やした。以前も同じような場面があったはずなのだが、当時はそれほど困ることはなかった。頭の柔軟さは年齢に反比例するということであろうか。転職においては、職場の文化の違いに早く慣れることが肝要である。“郷に入っては郷に従え”の真髓をここにきて体感したように思える。

現在は、鉄道、電力機器、昇降機といった製品の強度信頼性評価に携わっている。やりたいことを担当させても

らえる今の環境に、ようやくたどり着いた、というのが本音である。また、機械工学以外の知識を活かせる場面も多々あり、培ってきた知識は今でも貴重な財産である。転職がすべて成功につながるとは限らないが、私の場合は、うまく成功につながることができたようである。

7. おわりに

取りとめもなく書いてきたが、転職は人生を左右するイベントの一つである。転職しないで済むのであれば、それに越したことはない。変わることも、変わらないことも同様に大切である。進む道を決めるのは、自分自身の責任に帰するということが伝われば幸いである。さて、2009年は家を新築し、2人目の子供も授かった。私の人生を左右するイベントは、これでしばらくお預けになるとよいのだが、